



Title	大廓エクспанション再論
Author(s)	北條, 芳隆
Citation	待兼山考古学論集. 2025, 4, p. 195-204
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105041
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

大廓エクспанション再論

北 條 芳 隆

1. 問題の概要

弥生終末期の東駿河地域では大廓式の大型壺（以下大廓型壺）と呼ばれる特徴的な大容量の壺が出現し、古墳時代前期中葉までの期間限定で関東の相模や武蔵・安房、中部の主に甲斐地方に搬出された。また少数は近畿地方にも搬出されたことがわかっている。筆者はこの現象を「大廓エクспанション」と呼び、関東・甲州地域への初期前方後方墳の波及を象徴する事象だと理解している。なおエクспанションなる用語—ここでの意味は“経済領域の伸張”—は、G. アルガゼの「ウルク・エクспанション」(Algaze 2005 : pp. 98-109) からの借用である。

この壺の胎土にはカワゴ平パミスと呼ばれる天城山帯（皮子平火山）噴出の白色軽石が多量に練り込まれている。この軽石は鉄分を含まないので焼成後の器面は黄白色を呈し、多孔質かつ軽量なのに硬質であるため識別が容易である。したがって搬出品と波及先での模倣品の区別も比較的早い段階から進められ、2013 年には分布域の大枠が押さえられた（柳沼 2013）。

さらに静岡県沼津市高尾山古墳の発掘調査結果は、大廓型壺生産の本拠地一帯での様相を明らかにした。後方部中心主体部上には大廓Ⅰ式の壺が添えられた一方、周溝内には大廓Ⅲ式の各器種土器類が供献されていた（沼津市教育委員会 2012）。また墳丘盛土内には大廓型壺の膨大な細片がバラス状に混ぜ込まれた（沼津市教育委員会 2021 : pp. 34-42）。なかには大廓Ⅲ式以降に顕在化する特徴を帯びた破片が少なからず含まれる⁽¹⁾。つまり高尾山古墳は大廓Ⅲ式期の造営であり、この壺が各地へと搬出されるピークも同時期であることが確定したのである。

ただし前方後方墳は近江から東海、中部高地、関東周辺一帯の上位階層者に採用された墳墓である反面、大廓型壺は土製容器なので、両者はどのような



図1 最大容量の大廓型壺
（東松山市保管）

脈絡のもとで結びつくのか、その説明が目下の課題である。

この解題と向き合い、筆者は完形品に近い遺存状態の大廓型壺 14 点について実測図に基づく容量計算を試みた。最大容量は 185 ℓ から 200 ℓ、最少容量は 22 ℓ であった。弥生終末期から古墳時代前期にかけての日本列島東半部において最大容量を誇る壺が大廓型壺なのである。図 1 は埼玉県東松山市高坂 3 番町遺跡出土の大廓Ⅲ式の事例であり、推定容量は 200 ℓ である。

次にこの壺の胎土に注目し、50 点前後の破片資料への比重計測をおこなった。その結果、以下の点が明らかとなった。弥生終末期の大廓Ⅱ式までは比重 1.7 前後と、通常の土器の比重と変わらない値を示す事例が多い。しかし大廓Ⅲ式になると比重 1.5 以下の資料が増加し、最終段階の大廓Ⅳ式には、比重 1.4 となる事例が多出するのである。発泡状態であるカワゴ平パミスの比重は 0.7 なので、比重は胎土に練り込まれたパミスの含有率に反比例する。そのため市販の陶土に粉碎したパミスを数段階の重量比で練り込んだ焼成プレートを作成し、パミスの含有量と比重との関係を導く実験をおこなった。その結果を図 2 に示す。比重 1.5 以下でパミス

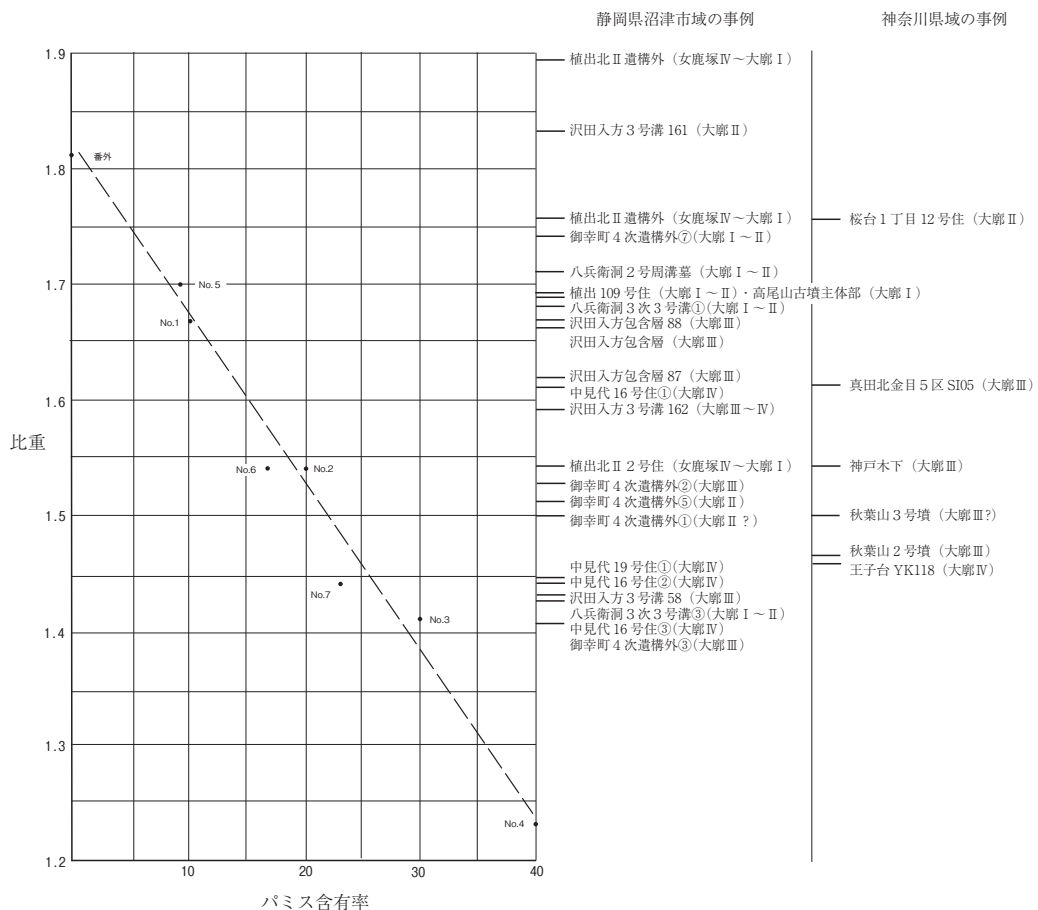


図2 焼成プレートにみるパミスの含有率と大廓型壺の比重

の含有率は重量比で 20 ～ 30% を占める素地が大廓専用胎土だと評価できる。さらに特徴的な口縁部内面の突帯を利用し木蓋を被せれば、水中に投下しても浮力が生じることを実験によって確かめた。多孔質の土製容器であっても内容物が濡れることはない。

以上の検討結果を基礎に、この壺は駿河地域で生産された稲粃を関東や中部地方に向けて海上・水上輸送するための容器であり、搬出先では稲粃を財源とする活発な市場交換が展開した可能性を論じた。同時に、そこで発生した余剰や富が原資となり、荷揚げ場所の近隣において前方後方墳が築造される現象が発生したのであらうと考えた（北條 2021）。2017 年に示した最初の試論（北條 2017）をふまえた再検討の結果であるが、胎土の問題や水中での浮力の問題を詳細に詰めることで、各方面から頂戴した疑問や批判に応えたつもりである。

とはいえ、筆者の見解には依然として批判の声が大きい。この点については私案への賛否を含め、立花実が具体的に論じたことで要点も明確になった（立花 2021）。批判は次の 3 項目にまとめられる。その第一は、この壺に稲粃を収容し遠隔地に運搬したとする推論の妥当性および実証性への懐疑である。第二は、大廓型壺自体が魅力的に映ったがゆえの積極的受容であった可能性への配慮を欠く私案への警鐘である。第三は、この壺の搬入先における市場交換の想定や、近隣に築かれた前方後方墳の被葬者が市の司であった可能性を論じる方向性への強い違和感である。そこで本稿では、奈良県域での大廓型壺の出土状況に焦点を当てつつ、立花批判に応じることにする。

2. 纏向辻土坑 4 下層出土の大廓型壺

出土状況と型式学的位置 大廓型壺の歴史的な性格を最も典型的に示すのが奈良県桜井市纏向遺跡辻土坑 4 下層からの出土例である。本土坑は径 3 m、深さ 1.5 m の大型土坑であり、上層・中層・下層に分層された（奈良県立橿原考古学研究所編 1976：図 30、p. 54）。土坑の底面は青灰色粘土層に到達しており、調査時にも湧水が多かったと報告されている。このことから本土坑は井戸としての機能があったとも指摘されている（山崎 2022：p. 240）。

周知のとおり、弥生時代終末期から古墳時代前期にかけての土器編年上の標識資料として本土坑出土資料は注目されてきた。さらに最近の成果としては、大廓型壺の型式学的な帰属問題を含め、東海諸地域との並行関係を早野浩二が解明している（早野 2020a, b）。早野によって再トレースされた本土坑の断面図（図 3）と、各層位から出土した土器の様相（図 4）を転載する（早野 2020a：pp. 375-376）。

大廓型壺は図 4 右上の 100-37（黒褐 4）と 100-35（黒粘）の 2 点であり、どちらも大廓Ⅱ式の特徴を有しサイズも揃うため、仮に同一個体であっても違和感はない。また胴部片の左側に配された黒色粘土層出土の S 字状口縁甕は、102-71 が A 類新段階、102-75 が B 類古段階で

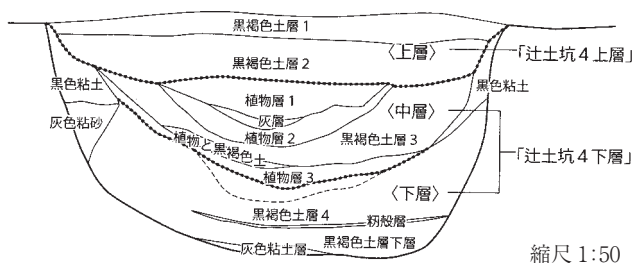


図3 辻土坑4断面図(早野 2020a 文献より)

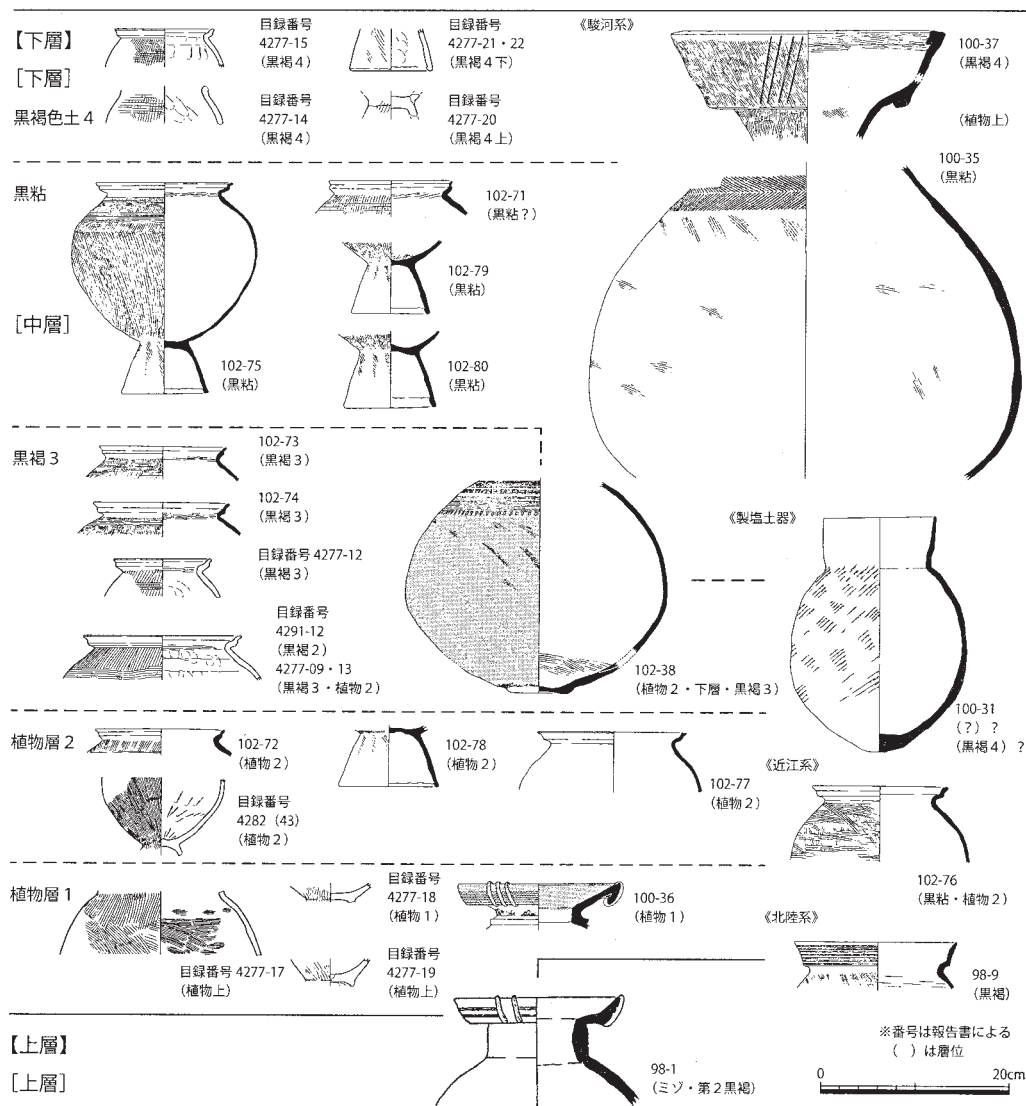


図4 辻土坑4出土東海系土器等と層位(早野 2020a 文献より)

ある。そのため本土坑下層資料は「土器の混在状況や接合関係をも勘案すれば、前後の型式をわずかに含みながらも、総体として、早5期（≒廻間Ⅱ式3段階）に対応するとの理解が最も整合的であろう」（早野 2020 : p. 337）と結論づけられた。つまり大廓型壺2点は、纏向3式・同4類の新相、庄内3-布留0式期に東駿河から搬入され廃棄されたという、弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけての移行期に帰属することが確定したのである。

粃殻層との共伴 型式学的な位置づけ

とは別に、ここで強調したいのは本土

坑の下層、黒褐色土層4の直下に粃殻の堆積層が存在した事実である。大廓型壺のうち口縁部は小破片に分かれ黒褐色土層4から出土したことが報告書の図版108から確認できる。壺が稲粃収納容器である可能性は高いため、廃棄時における粃殻との共伴事例として評価しうる。

また同一層位出土の他の壺形土器との容量比較も有効であろう。小型の直口壺3点と製塩土器（図4：100-31）を除く下層出土の壺（図4：102-38など）は、報告書において胴部までが図化された個体で数え大廓型壺以外に6点あるが、その容量は直口壺（報告書掲載図99-28）が9.8ℓ、パレス系壺（同図100-38）は胴部上端までで7.4ℓとなり、他の個体は6ℓ～3ℓ程度である。一方の大廓型壺の容量は胴部上端までで39.7ℓあり、頸部までを想定すると40ℓ前半台だと推定される。したがって粃殻が生成される精米行為より前の時点において、稲粃を収納した壺の主体は大廓型壺であった可能性が指摘できるのである。

辻土坑4と辻地区建物2 さらに辻土坑4の性格については、南東方向6mの地点から検出された辻地区建物2との関連性が報告書でも指摘されている。この建物2での祭祀に供された土器類や残滓が当該土坑に廃棄された可能性である。図5に平面図を転載する（報告書掲載図41：p. 70）。ではこの推定に依拠し、諸状況を積極的に評価する。

ここで再確認しておきたい点は、本土坑下層出土の粃殻層、壺・甕・高坏など各種の器種構成みる相互関連性である。すなわち米の脱穀に始まり炊飯を経たのち供献と飲食に至るまでの、一連の儀礼的行為に沿って各種土器類の用途と行程は理解できる。40ℓを超える大容量の壺1ないし2点と、10ℓ未満の小容量の壺6点の関係は、前者が稲粃の搬入用で、後者は精米後の舂米を収納し調理場までの運搬に用いられたことを推測させる。

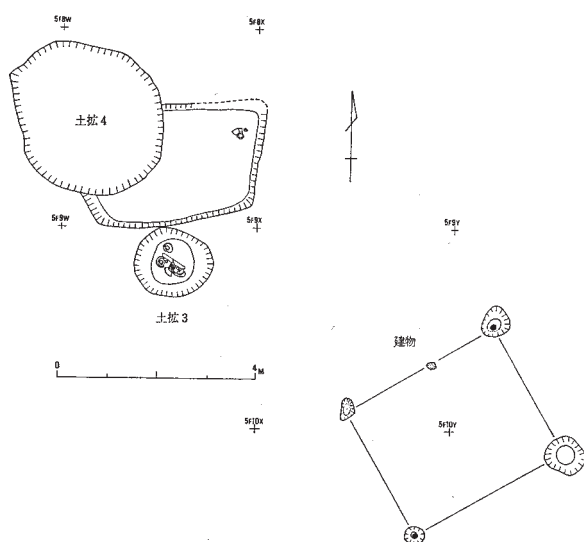


図5 纏向辻地区建物2と辻土坑4（報告書より）

また甕は30点前後出土しているが、胴部上半まで遺存する個体は11点あり、このうち庄内甕2点（報告書掲載図101-48、102-68）とS字状口縁甕3点（報告書掲載図102-75、102-79、102-80）の内面や底部付近には炭化米が付着していた。これら5点の甕は、炊飯を終えた直後の廃棄であったことを証明している。そのうえで付着炭化米の粃殻はどこに廃棄されたのかを問えば、下層の粃殻層に由来すると判断するのが自然である。前述の小容量の壺を介して精米後の春米が注がれ、これらの甕で炊飯されたと考えられる。ちなみに炭化米が付着した庄内甕の容量は4.9ℓ（報告書掲載図101-48）と2.4ℓ（同102-68）、S字状口縁甕（同102-75）は3.0ℓである。先にみた小容量の壺の半量前後だとみてよい。

さらに炊飯後の飯やおかゆは高坏や鉢に盛られ、儀礼的な共食に用いられた可能性が高い。ようするに粃殻層を含む下層出土遺物は、1回の食物奉献に関わる諸段階の作業や儀礼行程に伴う生成物や土器類であった可能性が指摘され、それぞれの使命を終えた順に土坑内に廃棄されたと推測できるのである。

服属儀礼としての食物奉献 纏向遺跡辻地区は、東にそびえる弓月岳409mピークを正面に据え、大型建物群から石塚古墳後円部中心・矢塚古墳後円部中心付近までを貫く東西中心軸線上に位置する。この中心軸の北側脇にあって石塚古墳から約200m東に位置する辻建物2も、1間四方のごく小規模な建物ではあるものの、初期倭王権の中核域の一角を占めたことが確実視される。したがって、ここで執りおこなわれた食物奉献も高度な政治的意味を帯びるものであった可能性が高い。具体的にいえば、東方世界の諸地域集団が食物を奉献する行為を通じて初期倭王権に迎合する意志を表明したのだと解釈できる。

搬入土器から判断すれば、この儀礼に参画したのは、東駿河を東端とする東海・伊勢湾沿岸地域までの諸集団が主体であった。付带的に近江地域の関与も指摘できる。ただし容器としては壺のみを持ち込んだ東駿河、少数の壺と甕を持ち込んだ伊勢湾岸、甕のみを持ち込んだ近江という器種組成の差があり、現地の大和地域からは壺と甕を含む各種の供献土器が提供された。

先に述べたように、庄内甕2点とS字状口縁甕3点には炭化米が付着していた。このことは建物2での祭祀にあたり、炊飯を担ったのは地元側と伊勢湾岸地域から到来した人物—おそらく女性の奉仕者たち—であり、両者の協働であった可能性が高いことを物語っている。

では、ここで炊飯されることになった米はどこで栽培・収穫され、どのようにして纏向遺跡に持ち込まれたのであろうか。産地として最も可能性が高いのは東駿河であり、大廓型壺に収納された稲粃は、太平洋沿岸航路を伝い伊勢湾岸に到着したのち、河川（鈴鹿川か）を遡上し伊賀盆地越えて木津川もしくは初瀬川を降り大和に至ったか、美濃と近江を経由する経路のどちらかであったと推定される。途中の船越（峠越え）にはソリが併用されたであろう。もちろん大廓型壺に収納された稲粃が献上されたとはまでは理解しえたとしても、東駿河地域の集団が大和へ直接出向いたとはまではいえない。炊さんに使用された甕は伊勢湾沿岸部および大和産な

ので、伊勢湾沿岸部の人々が東海諸地域を代表して食物奉祭を実施した可能性が高い。

ところで上記のように復元される儀礼は、古代史学で強調される王権への服属儀礼と類似する点にも注目したい。どのような儀礼かというと、被征服側の政治勢力が、その領域産の穀物や食材を調理し供献することによって大王への服従を誓う饗応であり、それが新嘗の原型だとされる（岡田 1962/1970 改訂）。しかしこうした服属儀礼は、記紀編纂者にとっても「相対的に古いものとして意識されていたものと思われる」（岡田 1970 : p. 47）と岡田精司が推定したとおり、被征服か自発的従属かを問わなければ、類似した様相は3世紀前半にまで溯る可能性が指摘できる。その意味でも、真に重要な遺構と遺物が辻地区建物2と辻土坑4下層なのである。

なお祭儀の開催時期について付言するなら、辻建物2の軸線は「高い月」の冬至付近に現れる北限の満月の出現方位との一致を示すため、祭礼開始のタイミングは冬至付近の満月が昇る日没時であった可能性が高い（北條 2022）。有力候補となる年代は235–236年か255–256年の冬至およびその翌夕刻である。なお辻建物2と同様の解釈が可能な祭儀施設としては以下のものが指摘される（北條 2024）。島根県田和山遺跡の山頂遺構群（弥生中期末）、愛知県朝日遺跡 SZ132（弥生後期前半）、佐賀県吉野ヶ里遺跡北内郭（弥生終末期）。さらに青森県三内丸山遺跡の6棟の建物群（縄文中期末）が日本列島では最古の事例である。伝統的な「高い月」の満月を遥拝する月の祭祀であり、初期倭王権もそれを継承しつつ自己の権威づけを狙ったのだといえる。

3. 批判への応答

では以上の検討結果をふまえ、冒頭で紹介した立花からの批判に応えたい。

稲粳との共伴、遠隔地への稲粳輸送用だとする見解の妥当性 大郭型壺に稲粳が収納された可能性について、現時点で最も有力視されるのは纏向遺跡辻土坑4下層にみる両者の共伴関係である。ただし厳密な意味での共伴とはいえず、また消費場面での共伴なので、今後とも異論は出されるであろう。

その一方、重量が嵩む荷物を遠隔地に輸送するためには、海上・水上輸送が最も適した手段であったことに疑問の余地はなく、容量が大きく軽量かつ頑丈な大郭型壺は、荷物の収納容器として十分な機能を発揮しえた。さらに口縁部内面の突帯は木蓋の挿入に適した工夫である。こうした工夫が伴う事実こそ、大郭型壺は収納物の海上・水上輸送に適した容器であることを証明している。

次に収納物の問題であるが、弥生終末期の東駿河を含む駿河地域は、海岸平野への広域水田開発が進展しつつあったエリアの東端として周知されている。この点を重視する以上、収納物

の最有力候補は稲粃だといえる。さらに弥生終末期における関東各地の特産品のうち、東駿河にもたらされた文物としてはグリーンタフ製管玉（相模産）と水晶製玉類（甲斐産）、それに麻布（常陸産）が想定され、稲粃に次ぐ候補である。こうした物産品についても大廓型壺に収納すれば、遠隔地への海上・水上輸送が可能である。第一の懐疑への応答は以上である。

大廓型壺の象徴性をめぐって では大廓型壺は、大容量の壺を制作する技術が失われて久しい弥生終末期の社会にあって、いわば“東駿河ブランド壺”としての象徴性を帯び、それを眼にする人々を惹きつけたといえるのであろうか。纏向辻土坑4下層への廃棄状態をみれば、回答は明らかに否定的である。

仮にこの壺が空身で搬入され初期倭王権に献上されたのだとすれば、分割された破片が土坑に廃棄される状況は不自然で、むしろ埋納など相応の取り扱いを経た形跡が伴ってしかるべきである。さらに廃棄の憂き目にあったとしても、献上から廃棄までには一定の時間の経過が想定される。しかし早野の言説を引用したとおり、下層出土遺物群は時間軸上での様式的なまとまりを示し、土器編年上の標識資料として評価される。つまり製作から廃棄までの同時期性が明確である以上、空身の壺が辻建物2の近隣に置かれ、祭祀に供されたとの推論も成立し難い。むしろ上述のとおり、辻建物2を舞台とする食物奉獻に関わる一連の行程のなかで、大廓型壺は相応の機能を果たし使命を終えたのちに廃棄されたと理解するほうが自然である。

なおそのさい、特徴的な複合口縁部をもち胴の肩部に結節縄文を施す独特な容器に収納された稲粃がこの場での祭祀に供された、という経緯を参集した人々に印象づけるという意味において、大廓型壺は視覚効果を過不足なく発揮したことも間違いないところであろう。ようするに内容物の由来はどこかを明示し、遠隔地性を表象する機能もこの壺には備わっていたのである。多孔質で硬質かつ軽量な大型壺自体が魅力だったのではなく、遠来の内容物がもつ高度な付加価値にこそ大和側の人々は惹きつけられたとみるべきである。以上で土器の専門的研究者から発せられた第二の警鐘への回答を終える。

経済的側面重視への批判をめぐって 辻土坑4下層資料と辻建物2から復元される食物奉獻は、初期倭王権への服属儀礼であったと理解できる。脱穀や精米を経たのち炊飯された飯の供与は贈与交換であり、本稿で論じたとおり、ときに高度な政治性を帯びた。

ただし稲粃自体は現物貨幣ないし穀物貨幣として流通し、価値の保蔵性は10年間担保される。精米後の春米であれば1年程度の価値の保蔵性しかなく短期的な貨幣となる⁽²⁾。ようするに調理前の稲粃や春米の流通は商品・市場交換の脈絡に則して理解されるのである。大廓型壺の搬出先での様相もまた、そこには稲粃が収納されていた可能性が指摘できる以上、稲粃を原資とする経済的側面に引きつけて評価されることになる。

こうした市場交換の重要性にいち早く言及したのは都出比呂志である。都出は用語法として「マーケット」や「市」を用いながら、日本列島の先史・原史社会における経済的側面の重要

性を説いた（都出 1997）。こうした見方の妥当性を証明する史料は『魏志倭人伝』中にある「収租賦。有邸閣。國國有市。交易有無。使大倭監之」（租賦を収めさせ、保管用の邸閣が有る。国々に市有り有無を交易す。大倭を使わしこれを監さしむ）である。さらに「自女王國以北。特置一大率檢察諸國。畏憚之。常治伊都國」（女王国より北には特に一大率を置き諸国を檢察さしむ。国々はこれを畏れ、常に伊都国にて治める）と続く。女王卑弥呼の治世下では市場交換が活発で、諸国の交易には王権側の統制が及んだと記された個所である。この記載がある限り、考古学でも経済的な側面が重視されるのは必然であろう。

筆者の見方も都出説の延長線上にあり、弥生・古墳時代の市場交換における現物貨幣の問題を加味し若干の補足説明を加えたにすぎない。

各地の上位階層者の原資は「租賦」であり、租税と賦役の両義性をもつ。ただし「邸閣」は倉庫を意味するので、徴税対象の主体は稲束もしくは稲粃であった可能性が高い。なぜ稲束や稲粃なのかといえば、それがこの時代の貨幣だったからである。さらに諸国の市に大倭が置かれた理由はどこにあり、最上位の一大率はなぜ伊都国で統制したのかを問えば、対外貿易を含む諸国の市場交換は重要な富の源泉であったからにほかならず、それゆえ市場の円滑な維持管理は重要な政治課題だったからである。こうした徴税や市場交換の様相は、3世紀の倭国が稲粃建ての経済圏を支配領域内で確立していたことを物語っている。

では纏向遺跡辻土坑4下層出土の大廓Ⅱ式の壺が示すものとは何か。東駿河以西の太平洋沿岸地帯の地域社会は、この土器と内容物を持ち込むことによって稲粃建て経済圏に新規参入することを表明したのだといえる。初期倭王権によって定められた、鉄を含む各種交換財の、稲粃斗量に換算された交換レートを受諾したのである。いいかえれば「國國有市。交易有無。使大倭監之」の領域が東側へと拡張される契機だったのであり、この時点からは東方諸国の市に監督役の大倭が置かれ一元的な市場管理が始まったと理解できる⁽³⁾。もちろん初期倭王権の実質的な力量は我々の想像以上に低かったと推定されるので、近江や伊勢湾沿岸地帯の諸集団が大倭の任を代行した可能性が高い。それが大廓エクспанションなのである。

以上のような経済的側面での基本認識を前提とするので、関東や甲州に築かれた初期前方後方墳の被葬者像としては、東海からの派遣か現地任用かは問わないものの、市の司が有力候補だと筆者は理解する。この点が第三の違和感への応答である。さらなる批判に期待する。

註

- (1) 整理作業中の出土遺物を筆者が実見したさいの観察結果にもとづく。
- (2) 春米も支払用の貨幣であった史実は、たとえば紀貫行の「土佐日記」でも確認できる。
- (3) ただし恒久的な市場交換の場としての都市化には至らず、纏向遺跡衰退後の古墳時代前期中葉

以降、関東地方の内陸部を除く日本列島全域は、着実に非都市社会へと向かう。代わりに大型前方後円墳の築造場所の近隣に随時な市が置かれる状態へと変容した可能性が高い。

引用文献

【日文】

- 岡田精司 1962 「大化前代の服属儀礼と新嘗」『日本史研究』60・61 原著 / 同 1970 『古代王権の祭祀と神話』改訂再録 塙書房、東京：pp. 15-67
- 立花 実 2021 「北條論文『大廓型壺の胎土を考える』による脳内考古学」『西相模考古』第 29 号、神奈川：pp. 97-106
- 都出比呂志 1997 「都市の形成と戦争」『考古学研究』第 44 巻 2 号、岡山：pp. 41-57
- 奈良県立橿原考古学研究所（編） 1976 『纏向』奈良県教育委員会、奈良
- 沼津市教育委員会 2012 『高尾山古墳調査報告書』（沼津市文化財調査報告書第 104 集）、静岡
- 沼津市教育委員会 2021 『高尾山古墳追加調査報告書』（沼津市文化財調査報告書第 123 集）、静岡
- 早野浩二 2020a 「古墳時代前期の都市的な遺跡と東海系土器—土器編年の並行関係の問題を中心として—」『世界と日本の考古学—オリーブの林と赤い大地—』（常木晃先生退職記念論文集）六一書房、東京：pp. 371-385
- 早野浩二 2020b 「東海系土器を基軸とした東西広域編年の実際」『弥生時代の交流—広域的な連動性を考える—（考古学リーダー 27）』六一書房、東京：pp. 199-204
- 北條芳隆 2017 「関東地方への前方後円（方）墳の波及を考える」『三角縁神獣鏡と 3～4 世紀の東松山』六一書房、東京：pp. 43-66
- 北條芳隆 2021 「大廓型壺の胎土を考える」『西相模考古』第 29 号、神奈川：pp. 65-96
- 北條芳隆 2022 「纏向古墳群と周辺景観」『纏向学の最前線—桜井市纏向学研究センター設立 10 周年記念論集—』桜井市纏向学研究センター、奈良：pp. 185-194
- 北條芳隆 2024 「稲作暦と稲束からみた古墳時代の成立過程—景観史と経済史の視点から—」『島根県考古学会誌』第 41 集、島根：pp. 1-12
- 柳沼賢治 2013 「大廓式土器の広がり—駿河以東について—」『駿河における前期古墳の再検討—高尾山古墳の評価と位置づけを目指して—』静岡県考古学会、静岡：pp. 21-30
- 山崎孝盛 2022 「古墳時代初頭の水辺祭祀—纏向遺跡の祭祀土坑・纏向型祭祀を題材として—」『纏向学の最前線—桜井市纏向学研究センター設立 10 周年記念論集—』桜井市纏向学研究センター、奈良：pp. 237-250

【英文】

Guillermo Algaze 2005 *THE URUK WORLD SYSTEM*, second edition, The university of CHICAGO press.